



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.227
2013(平成25)年10月25日(金)発行

○69年前の1944(昭和19)年10月25日は、フィリピンで初の神風(しんぷう)特別攻撃隊の突撃の日。
○アジア・太平洋戦争の戦況悪化打開のため、大西滝次郎海軍中将の発案で、米軍の軍艦などに死を覚悟して攻撃機ごと体当たりする戦法の「神風特別攻撃隊」が編成されます。フィリピンのレイテ沖で初めて実行されたのが「敷島(しきしま)隊」の5名で、その中に南相馬市原町区本町出身の「中野磐雄」(19歳) <写真>がいます。美談になり「軍神」「神鷲」と称賛されますが、両親は秘かに悲しんでいたというお話もあります。○神風特攻隊は終戦まで10ヶ月間、次々編成されて2,500から4,000名の若者が出撃し戦死。命令を出した上官はぬくぬくと生き残ります。○原町区馬場には陸軍飛行場跡、夜の森公園には中野磐雄慰霊碑があります。



3.11東日本大震災・原発事故の体験 33

広野町役場職員として町民の安全な避難のために

双葉郡広野町・元広野町役場職員 根本智夫さん(60歳・本会会員)



2011年3月11日(金)

14時46分大地震発生

3月11日金曜日、いつものように自宅を出て、広野町役場での仕事についた。年度末を迎えていて、忙しい時期だった。

午後一番で、明日の公民館事業「そば打ち体験」の準備のため、川内村のそば栽培農家へ、部下とともに出発した。約一時間で到着し、お茶をいただいているその時、山鳴りのような轟音とともに家が大きく揺れ始めた。倒れそうになった家具を押さえるのが精一杯。窓から外を見ると、電線がブラブラ揺れ、空が見る見る暗くなり雪が降ってきた。何が起きたか判断できない状況でした。

「大地震だ」と、すぐに役場に戻らなくてはと、川内街道を急いで下り、富岡町夜ノ森の山麓線(県道35号線)まで来ると、水道管が破裂して車も渋滞していた。でも「早く役場に戻らなければ」と、乱暴な運転をしながらも18時30分頃、役場に到着。庁舎内は、電灯もつかず水道も出ない状態で、避難してきた住民でいっぱいでした。

避難民であふれる公民館

上司に戻ったことを報告すると、「広野町のJR常磐線の東部は大津波で住宅がほとんど流され、公民館や保健センターに避難町民が来ている。救援を手伝うように」と指示され、公民館に向かう。館内は避難民であふれ、停電で寒く、津波の水に濡れたままの人々も多く悲惨な状況でした。とにかく町民の命を守ることを第一に、皆でベストを尽くした。

しばらくして、食べ物も飲み物もないことに気づき、避難町民に夕食を準備するため役場に向かった。防災担当課と相談し、災害用の食物を公民館と保健センターに届けるよう依頼し手配した。

急に自宅や家族が心配になって

再び公民館に向かったが、その車中で急に、家族のことが心配になり、車を自宅に走らせた。自宅は広野町の西部、海岸から約3キロの山麓の高台にあり、津波の心配はなかった。途中の道路を確認しながら、自宅に近づいた。すると「地震大きかったなあ」という82歳の母の声を聞き、無事を確認して一安心。町の大変な状況を説明したが、母はしばらくは信じる事ができないようだった。

また公民館に戻ると、非常食が配られていて安心する。副町長からの呼び出しがあり役場へ向かう。総務課長と3人で今後のことを話し合ったが、零時を過ぎていたので、床に毛布を敷いて横になった。今後のことが心配で、眠れない夜でした。

飲料水を低地の消火栓から給水車に

翌12日(土)は朝4時頃目が覚めた。町民から飲料水がないという連絡が入るが、対応できる職員がいなかった。幸い私は、水道課担当の経験があったので、副町長から相談にのるよう指示された。浄水場も停電し濾過もできないので、町内の標高の低いところに給水車を準備させ、私も現場に向かった。回栓器を使って消火栓の蓋を開け、給水車に水を入れさせ、また役場に戻る。

「原発が爆発 避難用バス4台を準備せよ」

12日午後4時頃だった。大熊町の第一原発が爆発したとの連絡が役場に入ったため、町民を避難させる車両バス4台を手配し準備しておくようにと指示される。バス3台の運転手にはすでに連絡しており、4人目が私と名指しされ、多少驚いた。町長と副町長に「広野町の第一番目の避難になるが、お前がバス4台の責任者として先頭を走り、とにかくバスを西か南に向かわせてほしい」と直接指示され、責任の大きさに緊張しました。(裏面に続く)



避難先も決まらないままでの出発

12日午後6時頃、いよいよ私のバスを先頭に、避難町民を乗せたバス4台、その後に自家用車で避難の約70台を連ねて広野町を出発しました。関係職員とは「国道6号線は津波で久ノ浜から南は通行できないが、可能な限り事故原発から離れよう」と話し合っていました。夜道で道路の損壊も予想され、とにかく西へというだけの不安な避難でした。阿武隈山中の道をゆっくりと西南へ走行し、いわき市の好間工業団地に到着。役場と連絡を取り合い、国道49号線を郡山方面に向かうことにする。49号線は地震で傷んでいなかったし、まだ避難の車も少なく、比較的スムーズに一団を進めることができた。

暖房が入った石川町体育館へ到着

しばらくして、平田村役場に寄りトイレの小休止をお願いします。村の職員と相談したが、平田村の避難所はもう満杯というので、西隣の石川町と連絡を取っていただいた。幸い石川町の総合体育館に収容が決まり、13日午前1時半頃、無事到着でき一安心した。寒い夜でしたが、体育館には暖房が入っておりその暖かさにもほっとし、大変有難く思いました。その夜、広野町民約233人が石川町職員に案内され、そこで休むことができたのです。

13日朝、目が覚めたが疲れが残っていた。体育館には高齢者も多く、いつもの薬を持ってこれなかった方や、急病人も出て、石川町の保健師さんには大変お世話になりました。町内の医療機関を手配していただき、バスで各病院を巡回したりしました。さらに体育館には広野町民だけでなく、楢葉町、富岡町、大熊町、浪江町、南相馬市やいわき市等からの避難者も増えていて、合計420人になっていた。

親切な石川町の皆さんに感謝

私は、石川町の職員には誰も知っている人がいなかったの、当初は大変不安でした。大勢の避難者の共同生活ですから、いろいろな出来事が次々と起こり、多くの方から様々な要望もあり、その対応に苦慮し、頭がパニックになることもありました。

でも、石川町の職員や町民の皆さんがそのたびに大変親切に対応してくださり、たくさんの方々にご協力をいただき、難問題もなんとか解決し乗り越えることができ、心から感謝しています。

原発勤務の息子たちに不安を

ところが、私が体育館で苦しい避難生活を送っていた14日頃、東京電力に勤務している次男から携帯電話で、「これから第一原発に、東京の大井発電所から放水の応援に出かける」とのこと。爆発して危険な原発へ行くのだから、大きな不安が頭をよぎった。「身体に十分注意し、危険を感じたら自分の命を大切に逃げて」と話して電話を切った。また、同じく東京電力に勤務している長男からも「これから福島第二原発から茨城の東海村に応援に行く」と、連絡が入る。親としてはただ、二人の息子に対し心の中で「がんばれ」とつぶやくしかなかった心境でした。

着の身着のまま仕事に熱中

とにかく3月中は、日々刻々変わる住民の対応に追われる毎日で、仕事量も増加していた。私はずっと作業着も下着も実は汚れたままで、下着を新調しようと思ったが、小銭入れと免許証だけしか持ってきていない。仕方なく洗濯しながら仕事を続ける有様だった。その後、生活用品が配られて、少しずつ状況も良くなってきたのだが。

妻も看護師として支援活動に従事

3月17日頃になり、看護師をしている妻のことが気になるが、携帯電話がつかまらない。ようやく妻から電話があり、毎日病院勤務が忙しく、今は患者を他の病院に移送するため郡山市の郡山工業高校の避難所にいるとのことだった。

ところが、石川町の職員にその話をすると、石川町も看護師不足でぜひ来てくださいと言う。早速、職員の車を借りて、避難している郡山市に迎えに行き、その日から妻も石川町で避難の人々の看護の支援活動にあたることになった。

平成24年4月、広野町に戻る

やがて石川町体育館の避難所も、4月8・9日に閉鎖され、避難町民は二次避難所のホテルや旅館等に移動が始まる。8月31日には、広野町の仮役場をいわき市湯本に移動。私の避難住居も、湯本温泉の春木屋旅館、さらに借り上げアパートへ移り、そこから湯本や広野の役場に通勤した。平成24年3月31日、いわき市の仮役場も閉鎖し、4月からは元の双葉郡広野町役場に戻った。私の自宅も、第一原発から24キロ地点なので戻って住める圏内にあり、不安だけ帰宅した。

今年3月、無事停年退職できました

私は今年3月31日で停年退職し、42年間の公務員生活を終えました。特に大震災からの2年間は本当に目まぐるしい毎日でしたが、なんとかやってこれたのは皆様のおかげと感謝しています。また、地震や津波でたくさん犠牲者が出た中で、家族10人全員が無事で元気だったことも有難いと思っています。〈2013年8月13日記〉